う。私は何處までも滿さんの妻です、決して母の言葉に從つて、心にもない人と結婚するやうなことはない。飽まで私は母と戰ひ、世間と戰ふ決心である。それだのに自分が信じてゐる戀人から、自分の心を解して呉れないのは情ない、これ程悲しいことがあううか。どうして滿さんは、私の心を解して呉れないのであらう。私は假令肉體が碎かれても、滅び去つても、心許りは決して碎かれも、滅びもしない、何處までも滿さんの妻として、女の道を立て通す、それは私にとつて、痛快なことでもあり、又有意義なことでもある。

兎に角、彼女の心が戀人に通じないことは、彼女にとつて可なり口惜しいことであつた。で、彼女はどうかして戀人に、自分の心を知らしめたいと思つた。

「イヤ、決して僕は英ちやんを疑つてやしないさ、疑つてゐないけど、世の中の人は却々惡辣だから、心が確乎してゐないと、遂には欺されて了ふから、注意までに云つたんだよ」

「エ、、そりや、私だつて考へてますわ、ですから其麼心配は要りませんわ」と、彼女は何等かの確心でもあるやうに、昂然と云ひ切つた。

それは自分の心持ちを少しでも、彼に知らせやうと、思つたからであつた。

「だけどね、餘程注意をしてゐないと思はぬことで動かされますよ、人を喰ふと云ふ狼が羊の皮被つてゐる世の中だから、却々危險ですよ」

滿はかう云ひながら、ニヤ〳〵と笑つてゐた。彼が餘り突飛な例を引いたので、彼女は思はずニツコリ笑つた。

「そりや、眞理ですわね、全くさうですわ、今日の世の中は」と、云ひ〳〵美しい眸を

膝の上に、落しながら、矢つ張り膝の上に「狼と羊」と指の先きで書いてゐた。

滿は膝を進めて、

「若しさう云ふ人間に出つくはした場合は、英ちやんはどうします」と、滿は熱心に訊いた。

彼女は尙も膝の上に、「狼狼」と書きながら、

「私、其麼人に相手になりませんわ、相手にしちや大變ですもの」と、云ひ切つて、彼の顏を盜むやうに見た。

「ぢや——若し相手にしなくちやならないやうに持ち込んで來たら、どうします」

彼は却々熱心だつた。

「それでも私相手にしませんわ、何處までも逃げますわ」

彼女は妙に昂奮して云つた。それは心の裡で、もしかさうした場合が、ありはしまいかと思つたからであつた。

「それでは若し逃げられなかつたら、どうします」

「そりや、逃げられますは、逃げやうとすれば幾らでも逃げられますわ、誠意さへあれば幾らだつて逃げられますわ！」

其答へも矢つ張り、昂奮した口調だつた。彼女の顏には、早あり〳〵と青筋が立つた。それは彼と後女の中を闇に、避けやうと努めてゐる人達に對する、憤怒の爲であつた。

「英ちやんには其誠意を何處までも貫くことが出來ますか！」

彼も亦英子のやうに昂奮して云つた。

「エ、、屹度貫ひて見ますわ！」

其言葉は簡單だつたが、極はめて力强い叫びに近い聲だつた。

滿も妙に興奮して、烈しく緊張した顏を彼女に向けながら、

「ぢや、今一歩進んで訊きますが、英ちやんには狼であるか羊であるか、それの見別けが附きますか」と、馬鹿に眞面目な顏して訊いた。

「其麼ことは私にや、判りませんわ、人の心なんつて判るもんぢや有りませんわ、貴下だつてお判りにならないでせう」

彼女は彼が自分の心持さへも、能く解して呉れないのだから、彼こしても人の心持が解る理由がないと思つたのである。

「所が僕にはそれが判るんですよ」と、ニコ〳〵しながら頭をガク〳〵動かしつゝ言

つた。彼女は餘程、「それぢや、妾の心持知つてますか」と、云ひたかつたが、何こなく氣の毒なやうな感じがしたので、口まで出てゐたのをモグ〳〵させて、呑み込むで了つた。それと同時に、彼は言葉を續けた。

「それが判らなくちや、矢つ張危險ですね」

彼は尙も疑はしい態度こ共に云つた。

「イ、エ、其那ことは有りませんわ、大丈夫ですわ、妾には堅い信念がありますから」

彼女は頑こして、少しもわだかまりなく、持つて生れたまゝの純な、無垢な、態度だつた。で、彼もそれ以上突込むて、訊く必要を認めなかつたので、

「さうですか、それなら好いけど……」と、何んこなく物足りなさうに云ふのであつ

た。

「貴郎は妾を疑つて居被るやうですけど、妾、眞實に大丈夫よ、殺されたつて人の自由になりやしませんわ」

英子はさも〳〵腹立たしさうに云つて又もツンとした。

「何も僕は疑つてやしないさ、只注意までに云つたんですよ」

彼が斯う云つたとき、英子は急に頂垂れた。今までの興奮が、夢のやうに覺めて、俄に元氣なく考がへ込むだ。

滿さんが入營した後は、一體どうなるであらう。母は必ず嫁に行けと攻めるであらう。德子は德子で益辛く當るであらう。若し妾が母の言ふことを利かなかつたなら、母は飽くまで妾に絡まつて來るであらう。滿さんのことを思ひ切れと言ふに相違ない

其のとき妾は何んと言へば良いのか知ら。まさか滿さんと一緒にして下さいと、訴へる理由にも行くまい。それかと言つて、默つて居たなら嫁くべく餘儀なくされて了ふであらう。滿さんを忘れさせる爲には、母は色々と手管を勞するであらう。心配もするであらう。

此那ことを次から次へと、考がへ出すと情的な彼女は、狂はずには居られなかつた。で、思はず、

「滿さん！」と、叫んで彼の膝に泣き崩れたのだつた。

彼は不審さうに、彼女のフク〳〵した肩の邊りを忱つと見てゐたが、軈て其肩の上に手を乘せて、

「英ちやん、どうしたんだ」と、云ひ〳〵軟らかく搖ぶつた。で、彼女は烈しく啜り

上ながら、

「ごうもないんですけど……妾、悲しくなつたの、貴郎こお別れするのが」こ、喘ぎ〳〵甘へるやうに云つた。

「其那こと云つたつて仕様がないさ」こ、彼は憤然こ云つた。

「そりや、さうですけど……」

彼女はかう云ひ切つたが、まだ何か云たひさうな表情を示した。

「なに時々君の家へ行くよ、だけどお叔母さんが厭な顔するからね、實の所は英ちやんの家へは行きたくないんだよ」

「眞實にお母さんはどうして彼那なのでせうか」

「僕を嫌つてるからさ」

「嫌ふの嫌はないのつて血を別けた甥ですもの、彼那にしなくたつて好いこ思ふわ、妾眞實に氣の毒でなりませんの」

英子は母の罪を自分で、負つたやうな氣になつて、辯解らしく云つた。

間もなく女中が、夕飯を運んで來たので、彼女は驚いたやうに、衝動的に立つた。

そして立つたなり、

「妾、遲くなつたから、歸りますわ」こ、落附きのない態度で云つた。

「さうね、餘り遲くなつても不可んから、歸られた方が好いね、又お叔母さんがヒステリーを起すから」

「眞實です、わぢや、妾失禮しますわ」

彼女はかう云ひ〳〵立ち去つたのだつた。

滿が入營してから、英子の心は、だん〳〵こすさんで行く許りだつた。淋しい、賴りのない、そして敵の多い中を——意味もなく生活して行くことが、彼女にこつてこれ程、苦しい、悲しいことであつたか知れない。此那生活をして行く位なら、一そのこと死んで行きたい、こさへ思つた。

それに母や、德子や、親戚の人達が、彼女の行動に付いて、色眼鏡で見てゐるので、益彼女の心を焦ら立たせたのであつた。さうだ、却てそれが、我の强い彼女をして、反感を抱かせたのである。

さうした强い心の焦燥こ、燃ゆるやうな恐ろしい、反感心の下に、苦しい、そして悲しい月日を送つてゐたのだつた。

で彼女が持つて生れた、其まゝの無邪氣な姫心は、何時の間にか消え、それに代るべき、恐ろしい、呪はしさが、自然こ襲つて來たのだつた。

だから英子は、これまでのやうに、純な、無邪氣な彼女でなくなつた。些つこした ことも速ぐ腹を立てたり、ムキになつて怒り出したり、理由もないことに——必死になつて反對したり、兎角、處女こして、否——大家の姫こしての、行ひに缺けて了つた。さうだ、彼女の我が儘が、日を經るに從ひ一層烈しくなつて、理が非でも、自分が思つたこと——考がへたこと總てを貫かねば止まぬこ云ふ、ヒステリックな女性になつた。

それでも戀人から、手紙が來た日だけは、何日よりか從順だつた。腹立たしいことがあつても、左程怒りもしなかつた。そして滿のことを能く云へばこれ程、怒つてゐ

ても、ニッコリ笑ひ出すこと云ふ、狀態だつた。

噫！　娘心――戀に精魂を失つた女性の感情――それは實に無謀であつた。熱烈であつた。そして又殘酷でもあつた。

さうだ、當時の彼女の心持を知るには、滿に宛た彼女の艶書を見れば、能く判る理由だ。其艶書はかうだつた。

滿さん！　近頃少しもゐらして下さらないのね。どうなすつたの、お忙がしいの、それともお出でになるのが厭なの、まさかさうでないんでせう。お忙がしいんでせう。妾、さう思つてるの。決して滿さんを疑ひませんわ。妾が絶對に信じてゐる滿さんは、お忙がしいんですわね、そりや軍隊生活ですもの、御自分が思つたやうにはなりませんわね。妾、御同情しますわ。ですけど、お手紙だけは下さいな、お

手紙位書く暇はあるでせう。ないこと仰有つても、そりや駄目よ。此度で三廻目ですもの、それに貴郎は一度もお返事を下さらないんですもの、隨分だわよ。少しは妾の心持にもなつて下さいな、お母さんや、德子さんや、可川さんに攻められてゐる妾の苦しい心持ちにもなつて下さいな。ね、滿さん、隨分苦しいことよ。それに貴郎からお手紙も下さらなくては、餘りに殘酷ですわ。悲慘ですわ。妾が賴る人は、天にも、地にも、貴郎お一人なんですもの、貴郎にだけは同情して戴きたいの。日本中の人を總て敵にしても、妾は別は苦しいこと、何んこも感じませんけど、貴郎に許りは同情して戴きたいわ。若し貴郎に見棄られたら、妾死ぬより外に途がないわ。貴郎許りは親にも身にも代へられないこと思つてるんですもの。死ぬのは當然へよ

ですからごうか同情して、此度は御返事を下さいなお願ひですからね。滿さん好いでせう。お手紙位下すつたつて。妾、眞實に無理なこと許り云つて、濟みませんけれど、可憐な乙女の告白と思召して、許して下さいな。そして御返事を下さいな御後生ですから。

貴郎からお手紙を下すつた日は、妾眞實に嬉しくつて、一日心が輕快ですの、ですから、其日は何だつた、能く出來てよ。そりや眞實に嘘のやうですわ。勉強だつてさうよ。三日分位出來るんですもの、ホ、可笑しいわね。

それだのは貴郎は、少しもお手紙下さらないんですもの。妾口惜しいわ。そして下すつたつた簡單な、短い手紙ですもの。物足りないわ。もつと長い、ローマンチックなのが欲しいの。貴郎のお手紙で妾は、愉快な日が送られるんですもの。御面倒

でせうけど、妾の我が儘な要求を入れて下さいな。その代り一緒になつたら、妾で出來るだけのことは致しますわ。假令どんな苦しい、悲しい、堪えられないだけのことだつた、貴郎のお爲になることでしたら、喜んで致しますわ。いゝえ進んで致して下さいな、母と戰ひ、兄と戰ひ、そして總ての人と戰はなければならない私に同情してせめてはお手紙だけなりと——さうだ、私が信じてゐる、私が好きな、私が愛してゐる滿さんからのお便りに因つて、私は充分に慰安を求めることが出來るんですもの。滿さんは察して下さるでせう。

それにね、私、今一つ腹立しいことがあつてよ。私口惜しくてならないの。それはね滿さんだつて知つて居被ることよ。ほらあの矢下さんのことよ。お母様は古臭い

因襲に囚はれて、嫁許だの、お父様の御遺言だのと仰有つて貴郎が入營して居被る裡に、結婚させやうと色々。心配して居被るの。ですからね、隨分辛いわよ。是非共矢下さんと結婚せよと攻めるんですもの。そりや、眞實に苦しいことよ。私が厭だと云へば、皆んなして仇かなんかのやうに、攻めるんですもの。私、悲しくてならないわ。そして速ぐ貴郎の惡口を云ふんですもの、私、口惜しくてならないわよ、眞實に暴れ出したくなつてよ。

誰が何と云つたつて、貴い感情を犧牲になんか出來やしないことよ。心にもない結婚かごうして出來ませう。其那無謀なことがごうして、出來るもんですか私、死んだつて、殺されたつて、其那ことは出來やしないわよ。ね、滿さんさうでないの。人間の感情程、貴いものはないんですもの。其の貴い感情をムザ〳〵と人の爲に蹂

み躙られるもんですか。假令身體は碎けても、大洪水の爲め押流されても、貴い感情だけは永遠に守りますわ。屹度守つて見せますわ。

自分を守る爲には、親も兄姉もありませんわ。自家保存の爲には、何ものも眼中にありませんわ。唯貴郎一人あるのみですわ。

ね、滿さん、さうですわね。今日は昔と異つて個人の自由が、總て認められてるんですもの。親だから、兄だからと云つて、子や妹の自由にまで立ち入ることを許しませんわ。法律だつて自由結婚を認めてるるんですもの。自分の感情に適しない人と結婚する必要はありませんわ。其那ことを餘義なくされる理窟がありませんことよ。今日は大正の世の中ですもの、堅苦しい、姑息な、因襲的倫理などに、捉はれてるる必要はありません。私は其那時代錯誤の人間でないことよ。

ですから私、お母様の古い頭が、癪に觸つてならないの。お母様の捉はれた偏見が、腹立しくてならないの、お母様が考へて居被るやうに、時代は何日でも同じでないわね。あれ！　あの通り空行く雲――川を流れる水は、進め〳〵こ云つてますわね。一日だつて停滯しませんわ。それにお母様は何日でも同じやうに思つて、私の自由や、感情を犧牲にしやうこして、居被るんですもの、私、ごうしても默つてゐられませう。外のことなら、兎に角、結婚なんてものは、一生一代の幸不幸になるんですものこれ許りは何こしても、犧牲になられませんわ。ですから、私、飽くまで戰つて飽まで勝利を得る考へですの。貴方もごうか勝利を祈つて下さい。ね滿さんお願ひですわ。

まだ〳〵澤山書きたいことは、ありますけご、後の樂しみに殘して置くわ。是非〳〵

ね御返事を下さいな、幾重にもお願ひします。

ごうか〳〵お身體を大切に――

ではこれで失禮します。左樣なら

滿　樣

淋しき　英子より

英子は此那長い手紙を書いて、それを戀人に送つた。手紙を書いてゐるときは、心が輕快だつた。が、何こなく母に對し、氣の毒なやうな、恐ろしいやうな、感じがした。けれごも、それは僅だつた。滿に對する戀しさこ懷しさに比べたら、物の數にも足りなかつた。

兎に角、彼女は人に優れた才媛であるだけに、其の戀も亦、人一倍に熱烈だつた。

偉人の戀が強烈であるやうに――彼女の戀も亦強烈だつた。で、それに伴ふ煩悶も、亦絶大だつた。戀人との媾曳を失つた彼女の心は、常に疊り勝ちだつた。そして其の疊りが今にも破裂しさうに思はれた。

が、母はそれとはなしに、滿との關係を遠ざけやうと努めた。それが又、彼女には見え過ぎる程、能く判つた。さうだ、頭が妙に昂奮して、馬鹿に過敏に英子には、母の云ふことが、總て呪はしく腹立しかつた。

「お母さんが何と仰有つても、私はお嫁になんか行きませんわ」まだ母がさうしたことを云はない先に、機先でも制したやうな、快心で云ふのだつた。

「それぢやお前は滿さんの家へも嫁くのが嫌と云ふんですか」と、母は皮肉らしく、腹立ち紛れに云つた。

さう突込まれると、遺に陰氣の泣き出しさうな顔して母の顔を怨めしさうに見詰めてゐるのだつた。

「それなら、それで好いけど、滿さんの所へ嫁きたいと云ふんぢや些つと困るからね」母はさう云つて、鬢を搔き上げた。

彼女は急に眞赤になつて、俯向ひたが、心の裡では烈しく悶えた。

「どうして、不可ないのですか、何故に滿さんとの結婚が不可ないのですか」と、訪ねたかつた。けれども、それがどうしても口に出なかつた。そして其那ことを訊いて見た所で、一言の下に斥けられることは、疑ひがない事實だとも思つた。

それは母が例の因襲的倫理に、捉はれてゐるので許嫁であるからですよ」とか又は「父の遺言だ」とか何とか、かとか偏見的な理窟をつけて、滿との結婚を反對すること

は、火を睹るよりも、明かな事實だと悟つたからである。

で、彼女は戰はずして逃げられるだけ逃げて、最後に勝利を得やうと決心したのだつた。

かうした母との問答が、幾度となく繰返された。けれども、彼女は其の都度、默々として反抗を示すのみだつた。

其の中に滿が、除除となつて歸つて來たので、彼女は遂に彼の許に、駈けたのであつた。

色男の選擧

一、蚊蜻蛉の曲藝

井戸端會議の集合が――さては喜田男君の評判か、お鍋ごん、お釜ごん、お鉢ごんの會合である。

何を話してゐるのであらう。百圓紙幣が縱からでも、横からでも、自由自在に、出這入すると云ふガマ口を遠慮容赦もあらばこそ、バクリと開け、口角泡を飛ばしての大評論、

「些いと、お鍋さん、貴女、喜多男さん、知つてる」と、お鍋ごんが太い、しやがれ聲で聞いた。お鉢ごんは得意さうに、

「知つてるわ、あの蚊蜻蛉の曲藝見たいな方でせう」と、答へるのであつた。

お鍋は急に、嫌な顔して、

「エ、さうよ」と、云つた切り俯向ひて了つた。

「お鉢さん、好い代名詞だわねホ、ホ、ゝ」と、お釜は堪へられないやうにして、笑ひながら共鳴した。

それを聞いた、喜多男君、眞赫になつた。

「何だつて、己れのことを蚊蜻蛉の曲藝だ！　好い代名詞だ！　酷いことを吐しやがるなと、獨り語を云ひながら、喜多男君考へ出した。

「併し己れは全く蚊蜻蛉の曲藝か知ら、全然嘘でもないやうだ。五尺八寸二分の身長を有する我輩が、十貫に八百目も足りないのだから、蚊蜻蛉の曲藝かも知れぬ。この

手この足――それは全く蚊蜻蛉のやうだ。蚊のそれのやうに細く、蜻蛉のそれのやうに痩せてゐるな、おまけに眼のデカイ所が、蜻蛉の出目に寸分違はない、して見ると蚊蜻蛉の曲藝と云ふのも、無理からぬことだ。寧ろ當然かも知れぬ、だが曲藝だけは餘分でないか。蚊蜻蛉見たいな奴だと云へば、それで良かりさうなものだ。何を苦しんで曲藝とつけたのだらう。併し能く考へて見ると、矢つ張り必要だなア。曲藝と云ふことは、奇拔であつて、滑稽を意味してゐるのだ。だから己れの顔が、奇拔であつて、滑稽であると云ふことを現す爲に附けたのだ。益癪だ。愈情ない。

どうして蚊蜻蛉の曲藝見たいな、滑稽な、奇拔な、人間が出來たのだらう。己れを生んだ親達が怨めしい。口惜しくてならない」

此那ことをそれからそれへと、考へてゐる裡に、お鍋ごんが口を利いた。

「だけど、私、喜多男さん大好きよ」

お鍋はかう云つて、ポッと顔を赤らめた。

それを聞いた喜多男君の喜びは、一通りや、二通りではなかつた。恰で宙に浮ひたやうに飛が廻つた。が、それは次の言葉に因つて不安さを感じ初めるのだつた。

「あら！　厭だわ、些いこお釜さん、お鍋さんは蚊蜻蛉の曲藝さんが好きだつて、ホ、ホ、可笑しいわね……」

「さうね、お鍋さんは隨分物好きね、私、驚いて了つたわ、ホ、ホ、」こ、釜ごんは共鳴したやうに云つて笑ひ出した。

「其那に笑ふものでなくつてよ、人には好き嫌いがあるんですもの、貴女等は、タデ喰ふ蟲も好きづきこ云ふことを知らないのね」

お鍋は腹立しく云つた。

「だつて、貴下、餘り滑稽ですもの、あんな蚊蜻蛉の曲藝見たいな男が好きだなんつて、ね、釜さん」こ、お鉢ごんはつけ〴〵こ云ふので、

「口で其那こと云つてたつて、心の裡では何こ思つてゐるのか知れないから、投票して見ませう」こ、お鍋がツンこして云つた。

「エ、好いことよ、投票して見ませうよ」

こう〳〵投票こ云ふことになつた。それを聞いた。喜多男君、さあ氣が氣でない。些つこ考へた所では、當選の見込がない。落選した日にやお鍋ごんにも見放されて了ふであらう。

さう思ふこ、喜多男君、立つても、ゐても、ゐられなくなつた。

二、買収！　買収！

喜多男君投票と聞いて、少からず心配を初めた。二人と一人ぢや、到底勝利の見込がない。多數黨にはどうしたつて闘はぬ。敗北は疑ひなしだ。ヤレ〳〵困つたな、何か巧案はないかなア、どうして遣らうかなア。

「ある〳〵良いことがある哩、さうだ〳〵買收するに限る、買收に然ずださうだ。過激派のお鉢ごんを買收して遣らう」

斯う考へたこき喜多男君は、五錢の燒芋を買つて、お鉢ごんの所へ走つた。そして早速、それでお鉢ごんを說きつけた。さうだ、此度の選擧に、是非己れを投票して、呉れと幾度も頼んだ。

で、お鉢ごんはお芋が欲しさに、喜多男君の要求を入れて、投票すべきことを承諾した。

そこで喜多男君は、ヤレ〳〵と太い息をついて、安心して開票すべき日を今や遲しと待つてゐたのだつた。

軈て開票すべき日が來た。喜多男君は愈得意になつて、開票の結果を見てゐた。

先づ第一に出たのは

「喜多男さん、大好き」投票者お鍋——

次に現れたのは

「厭な方よ、蚊蜻蛉の曲藝よ」投票者お釜——

この次が問題だ！　愈勝負なんだ！　さう思ふと、喜多男君の胸は張り裂けるや

うな大きな波動がした。が、沈つこそれを抑へて——片圖を飲んで、待ち控へてゐたのだつた。

所が意外にも、驚くなかれ、

「蚊蛉蜻の曲藝よ」「投票者お鉢」こあつた。

「ワハア！　お鉢ごん、一杯喰はせよつたな！　殘念だ！」こ、喜多男先生、火のやうになつて怒り出したのは、頗る滑稽だつた。

嫁と婿の專賣

一、嫁と婿の安賣り

私は何時でも考へずにはゐられない。今日の世の中が餘りに、偏見すぎるので考へずにはゐられない。——こ云ふのは外ではない。嫁こ婿の高賣りを希望してゐながらも、其の實彼等の內幕に立ち入つて見るこ、實に驚くべき墮落——醜體——さうしたものが彼等の身邊に、溢れてゐるにも拘はらず、矢つ張り嫁でも婿でも、高賣りしやうこしてゐる。何こ云ふ蟲の良い話であらう。

兎に角、我黨の貧的連中は、今日のやうに、嫁でも婿でも高く賣りつけやうこしてゐる、時代にあつては、却々嫁も買ひ切れたものでない。嘘八百を列べ、他人を欺罔

に陥し入れるやうなことでも、云はなかつた日には、一生嘆アなしで了らねばならぬ。それは何としても忍び得られないことである。一生涯嘆アなしで、孤獨に世を送れこは、餘りに聞えませぬ。出雲の大社さん、こでも云ひたくなる。

それがこ云つて、馬鹿正直な貧的な我黨にあつては、さう〳〵嘘も云へない。偶く嘘を吐いたこ思へば、それは直化けの皮が、剝げて了ふ。で、結局の所、嘆アなしで世を送らざるを得なくなるのだ。何んこ云ふ悲しい、情ないことだらう。

で、私はかうした煩悶したお蔭に、えも云はれない、立派な、正々堂々たる、或ここを考へた。それは云ふまでもなく、嫁こ婿の安賣の機關を設立するこことなんだ。さうだ、理想的媒介所の設立なんだ。

勿論今日こ云へば、絶對に媒介所がない理由ではない。東京の如きは隨分澤山ある

やうだ。けれども、今日存する所の媒介所なるものは、其の不完全なここ、其の不公平なここ、其の欺罔的なここ、其の高價なここ、其の他缺點を擧げる日になるこ、實に驚く程澤山な缺點が御座る。

第一我黨の貧的が、出入すべき場所でない。我々貧的の眼から見るこ、有名無實の機關であるこ、云はねばならぬ。如何に嫁が欲しくても、入會金五圓手數料數十圓ぶつたくられるに於ては、どうして躊躇せずにゐられやうか。それでも目的が達しられるこ相場が定つてゐれば、敢て數十圓に驚く理由でもないが、ごつこいさうは問屋が卸さぬ。先づ普通媒介所へ、御出入遊ばす。御大將こ來たら、我黨のやうな貧的先生には、鼻も引つかけないこ、云ふ恐ろしい、氣の强い、極めて高賣りの、おたんちやん方が、御出入遊ばすのだから、堪まつた理由でない。幾度會見料を思ひ切つて見た

所で調停の見込みは絶對にない。尻に帆かけの筆法で、ゴッンと來る肘鐵砲――ア痛いッと退却せざるを得ない。慘めな殘酷な狀態、これでは何時になつても嘘を云ふこの出來ない貧的先生は嘆アを持つことが出來ない。

それでは餘りに、殘酷である！　不公平である！　で、私は少からず考へた。考へた結果「嫁は要らぬか、嫁は――申込料僅十錢――十錢あれば誰でも來被い〳〵！」と云つたやうな、手輕な、安直な、媒介所が欲しいと思つた。即ち十錢の手數料さへ納めたなら、幾度でも會見が出來ると云ふ、簡單な媒介所が欲しいのだ。さうだ、十錢持つて行けば、誰彼の容赦なく、理想的な嫁を貰ひ婚を選ぶことの出來る機關が欲しいのだ。

入會金五圓ぶつたくられただけで、指を嚙んで　退却しなくても、良いだけの設備

が欲しいのだ。

で、私は其の宣傳に努めて見やうと思つたのであつた。

二、嫁と婿の公設市場

公設市場と云ふと、何だか物品でも、安賣りする所のやうに、誤解されるかも知れぬ。

が、決して其那ものではない。たゞ安直に出雲の大社さんの代理を力めるだけのことだ。一錢二錢の價をつけて、賣り出すのではない。彼れと是れ――是れと彼れと云つたやうに、當事者の意志に從つて、簡單明瞭に、而も、僞りのない結婚媒介すろ所に過ぎないのだ。

さうしたことを二三人の人に云つて見たが、扨て世の中の人はそれ程、進んだ頭の所有者でない。「馬鹿なことを云ふな其那ことを云ふと、人が狂者だと云ふよ、止せ〳〵」と、云つて誰一人として相手にしない。

で、私は又しても、考へ出した。

「世の中の奴は、怜悧さうに見えても馬鹿が多い、此那有益な社會的事業を遣らないなんて、言語道斷な奴だ。頭の古い社會の奴を相手にしたつて、仕方がない！」なぞ〻飛んでもないことを考へ出した。自分が現代離れのした。狂者じみた。ことを云ひ出して置きながら、正理な、現代的な人達を怨み出した。

ごうせ三十になつても、嗅アの來てがない奴が云ふことは、これ位な所であらう。こは他人樣が云はれることだんべい。

「だが併し能く考へて見給へ、此頃東京市こか、大阪市こかでは、公設市場だなんつて名目を附けて、盛に物品の廉賣をやつてゐる。勿論今日のやうに、物價が騰貴して貧富の懸隔が甚だしくなつては、公設市場の必要なことは、我々貧的を救ふ上に於て缺くことの出來ない、國家樞要の機關かも知れぬ。

兎に角物品の公設市場を設けた以上、婿や嫁の公設市場を設けないこ云ふ法がないそれを設けないこ云ふのは、甚だ矛盾した話ではないか。吾々の生活に必要な物は、米や、醬油や、砂糖許りではない。嫁も必要だ。婿も必要だ。米や、醬油や、砂糖が必要である——それのやうに、矢つ張り、嫁も必要だ。婿も必要だ。其の間に何の差等があらう。これを經濟上から云へば、需要こ供給——それに何の差等があらう。二十五歳を過ぎ三十歳になん〳〵こする、青年の要求——それは決して日用品の供給や、

需要の程度に、優るゝこも劣りはせぬ。

で、これを刑事政策、若しくば社會政策上の立場から云つても、決して價のない問題ではない。が、さうしたことは、餘りに理論に走るから、省略するが、兎に角、吾々人間が、社會共同生活を圓滿に、營む所以は、吾々の慾望を圓滑ならしめることに存するのではあるまいか、一つの慾望を入れるも、他の大なる慾望を犧牲にすることは、矢つ張り圓滿な社會共同生活が營まれない理窟ではないか」

だから我輩が、嫁や婿の公設市場の急なるを說くのも、蓋しこゝに存するのである。即ち公設市場へ行つたなら、見ごり擇りごり。貧乏は貧乏づれ。馬鹿は馬鹿づれ。阿呆は阿呆づれと云つたやうな筆法で、婿や、嫁を見合せたなら、極めて面白いことであらう。否、完全に結婚の目的が達しられるであらう。さうだ、思ふ通り、人材を得

ることが出來るであらう

こは嫁のない、憐れむべき、獨身者の云ふ寢語である。

一、獨身者窓から下女へ世辭笑ひ

二、火を貰ひに來て話し込む獨身者

三、獨身者昨日は洲崎今日は吉原

だんこ理窟

一、負ふた子に教へられる

近頃の子供は、却々隅に置けない。子供々々こ云つてゐるこ、其の子供の爲めに、まんまこ嘲弄されて了ふ。少くこも子供々々こ、輕蔑してゐる、親爺さんが、色々な新しいここや、社會學を敎えられてゐるここは、明かな事實だ。

甚だしいのになるこ、先生樣が生徒々々こ輕蔑してゐるもの丶時々其の生徒に因つて、新事實を發見したり、社會學を授けられたり、グの根も出ないまでに、突込まれてゴロリ、降服遊ばす先生方も、案外ないこも限らぬ。否、さうした事實は、社會にあり觸れてゐる。決して珍らしい、新事實ではない。

けれども、それは決して、先生樣が足りないのではない、生徒の方が餘りに、のび過ぎて來たのだ。

何れにしても、今日の子供君は、油斷もあつたもんでない。まだ肩揚の深いあごけない、可愛らしい、小供でありながら、岩田帶で身を堅めるこは、抑々何事だんべい。

それも無理からぬ話だ。親の分際でありながら、

「宅の娘ですか、ありやまだ子供でなア、小學校出た許りで、眞實に何んにも知らない無垢な子ですよ」こ、岩田帶の御目出度ここが、突發するのも、知らず辨へず、大平らで此那ここを云つてる親の氣が知れぬ。

勿論燈臺下闇で、自分の子供の行ひは、判らないのかも知れぬ。そこへ來るこ吾々

は流石に、商賣だけあつて、さうした不行跡者を能く知つてゐる。知るのも道理だ。三十の今日、はゞかりながら、ちん〳〵ながら、年頃の女こ行列して、一度も往來を歩いたことのない、極めて憐れなカツレツ先生なんだ。カツレツなるが爲に、さうした時分知らずの、不行跡者が眼についてならぬ。

「ハテ、感心な兄妹だなァ、兄妹で一緒に歩くなんつて」こ、獨語を云ひつゝ、それこはなしに、彼等の談話を聞けば、こはそも如何に、こは如何に、鼻垂れ娘の癖に何たることだい。

「ね、貴方、此度の日曜には、何處へ行きませうか」

「さうね、活動へでも行かうぢやないか」

「活動なんか、詰まらなくてよ、何時だつて見てるんですもの、お芝居が好いわよ」

「僕は芝居なんか嫌いだから、活動へ行かうよ」

「厭だわ〳〵私、厭だわ、活動なんかお芝居へ伴れて行つて頂戴よ、ね、些いこ、貴方てば」こ、猫撫で聲の、甘垂れ聲を出して、スネル所なごは、鼻垂れ娘所か、立派な〳〵な二本棒、統治者の一人である。

これが當世の子供こは、扨も〳〵恐ろしい世の中哉！

これで純な娘だの、花嫁で御座るのこ、大平らに、一角も、二角も貞女で御座るこ云ふ、面附きで嫁がれる娘君の氣が知れぬ。嫁ぐ娘君は、それで好いだらうが、さうした娘を頂戴した野郎の、迷惑は又格別であらう。

「七つ八つからイロハを習ひ、はの字忘れて——ぢや些つこ困るよ」

兎に角、「親の心子知らず」こ云ふことは、昔から多く云つてゐることだが、今日では

それが、反對なんだ。」子の心親知らず」に早替りしたのである。それは決して嘘でも何んでもない。誰だつて我子は可愛い、其の可愛い子を誤らせたくはない。だが往々過らせる、それはこりも直さず、「子の心親知らず」から起つて來るのだ。墮落せよこ積極的に命令はしないが、消極的に墮落して關はぬこ、云つてるのだ。これが當世の親心だ。さうだ親馬鹿なんだ。「負ふた子に教えられ、淺瀬を渡る」のなら理窟も立派に立つであらう。だが決してさうでない。「負ふた子に教えられ、深瀬を渡る」のだ。何んこ云ふ矛盾した親達だらう。

二、正當！　正當！

兎に角、世の中が進めば進む程、子供の思想も、感情も進むものだ。

で、時々先生方が、部下の生徒君の爲に、揚げ足を取られて、身動きも出來ぬハメに陷る場合がある。

「何んでも解らないこがあれば、遠慮なしに訊きなさい」こ、先生得意になつて、生徒に云つた。

すると生徒の一人が、

「それぢや、先生、何を訊いても關ひませんか」こ、生徒も得意になつて、元氣能く訊いた。

「ウン、何んでも關はんから、お訊きなさい」益先生得意面して云つた。

「だつて、先生は何日でも、變なこを訊くこ怒るんですもの」こ、生徒は些つこ躊躇したらしく云ふこ、

「今日は怒らないから、何んでもお訊きなさい教えてあげます」

さう先生が云つたので、生徒は無邪氣に、

「それぢや、先生、子供は何故女郎買が出來ないんですか」と、つけづけと云ふので、先生眞赤になつて、怒り出した。

「馬鹿なことを云ふな！」

「だつて、先生は今怒らないつて仰有つたんですもの」

「幾ら怒らないと云つたつて、事を缺いて其那ことを訊く奴があるか！　子供の癖に」

「先生だつて、頗る怪しいんだもの」

「何が訝しいのだ！」

「先生、其那ことを云つて、知らばくれるもんぢやありませんよ、ほら何日か先生忘れないでせう」

「何んだ！　失敬な！」

「ぢや先生、云ひますよ」

「何んでも云へ！」

「此の間の土曜日の晩に、ほら先生と、〇〇の所で逢つたぢや有りませんか、其の時先生が、「オイお前好い子だから、先生と此處で逢つたつて云はないでお呉れよ」と仰有つたでないの」

「ナ、何、ッ、其那ことはないよ」と、先生眞赤になつて、打消さうとしたが、却々子供は利かない。

「それぢや、先生皆んな云ひませうか」

「ァ、待つてク、呉れよ」愈先生困り切つて、無暗矢鱈に頭を掻く、生徒は其那ここには頓着なくつけづけ云ふ。

「そんなら、先生私が訪ねるここを答へて下さいよ、答へなけりや云ひますよ」

「ソ、其■に急ぐ奴が有るか」こ、先生太い息を吐く。

「答へて呉れますか」こ、生徒は短兵急に攻め立てる。先生絶對絶命になつて、

「ウン、答て遣る」こ、滋々ながら返事するのであつた。

「先生、子供はごうして女郎買が出來ないんですか、僕だつて男ですよ」

「出來ない、子供が行く所でない……」

「子供が行けないこ云ふ規則がありますか」

「規則！　生意氣なここを云ふな子供の癖に」

「ぢや、先生は法律に其那規定があるこでも仰有るんですか」

「其那規定があるもんか」

「なければ行つたつて好いでせう」

さう云はれて見るこ、先生二の句が續げない。嘘を云へば後が恐ろしい、それかさ云つて、行つても好いこは云へない。ハテさて困つた奴だな。「ナニ――まゝよ、自暴糞だ。正直に云つて遣れ」さう思ひながら。先生一割大きな聲で、

「實は行つたつて關はないのさ」

「さうでせう、行けない筈がないんですもの」こ、云ひ〳〵些つこ首を傾けながら、急に思ひ出したやうに。

「それからね、先生、僕等でもお金が要るでせうか」こ、隙さず訊いた。

「そりや勿論要るさ」

「お金なしに買つて了つたら、ごうなるでせうか」

「其那こことしたら、君の家へ取に行くさ」

「でも、僕は一錢もお金なんか有りませんよ」

「君になけりや、君のお父さんから取るさ」

「先生、其那こことはないでせう、お父さんこ僕こは人が違ふんですもの、僕が借金したからこ云つて、お父さんから取るこ云ふことはないでせう」

「ワハワ、此奴却々理窟を知つてやがるな」さう思ひながらも、先生知らぬ顔して、

「そりや、さうだが、君は未だ未成青年――即ち幼者だから、其の保護者が支拂はねばならないんだよ」

「先生其那ここ云つたつて、お父さんが追認しなけりや、お父さんは僕の借金を拂ふ義務は有りませんよ」

「ワハア此奴愈以て困らせよるな、生意氣に法律を半かぢりしてるやがつて」

其那ここを考へてゐる裡に、生徒は尙も言葉を續けた。

「ですから、先生、僕等のやうな子供は、女郎買しても、お金を支拂はなくても好いんですね」

「其那不當なここが有るもんか」

「だけこ、僕は正當だこ思ひます」

「何故だ」

「何故つて先生、能く考へて御覽なさい、先生は何時でも、私等を「生徒」「正當」と云つて居被るんですもの」

「ワハア！　マ、參つた」

子供々々こ輕蔑するな
これでも私は岩田帶

嬉しい事悲しい事

一、心の高鳴り

隨分お暑くなりましたこと。清樣は暑中休暇にお歸りでせう。東京は暑いさうですから、是非お歸りなさいな。私お待してゐますわ。

去年の暑中休暇には面白かつたわね。眞實に氣も心も浮き立つやうに嬉しかつたわ。

さうよ身も世もない程嬉しかつたわ。

彼の涼しい、彼の清い、天の橋立で二人は樂しく散歩したのね。的もなく歩いたわね。風に吹かれて――清い海を眺めながら。眞實に愉快でしたわね。私、當時のことを考へると、思はず微笑みますの。誰もゐないのに自然に顏が赤らむのですの。ホヽ

ホ、ホ眞實に處女つて生氣地がないのね。私、自分でも可笑しく思つてよ。ですけどそこが處女の誇りですのよ。處女であつて羞恥心がなかつたなら、そりや眞實に醜いものだと思ふわ。女性の淑やかさ、愼しやかさ、それがなかつたら、女性の美と云ふものはないと思ふわ。ですから、他愛もなく極り惡がつたりするのも意味がない理由ではないのよ。其那ことは私が云はなくたつて清樣は能く御存知でせうけど、話の都合で云はなければ何んだか、變になつたんですもの……」

それは兎に角清樣は本年も歸つて下さるんでせう。でないと私、眞實に淋しくて詰まらないわ。ね、清樣私貴方のお歸り許り待つてますの。そして二人で又天の橋立へ行きたいのよ。私、それ許り樂しんでますの。ですから、是非ね、好いでせう。私の我儘聽いて下さるでせう。私が信じてゐる清樣は——私の我儘を入れて下さるのね。

さうよ、屹度さうなのよ、私が好きな——私が愛してゐる清樣は親切な方なんですもの。必ず聽いて下さるわ。私さう信じてますわ。ですから、是非ね、お願ひですわ。そして天の橋立へ連れて行つて下さいな。

此那ことを申上げると清樣は、さぞお腹をお立てになるでせうけど。私にとつてはそれが何よりの樂しみですもの。聽いて下すつたつて好いでないの。親と親とがお許し下すつた仲ですもの。誰にはゞかる所はありませんわ。私さう思つてますわ。

何れにしても、來年は御卒業になるんですのね。御卒業になれば……私知らなくつてよ。貴方のお母樣が何とか仰有つたけど——清樣には判つて。判るでせう。玉椿の八千代までと祝福する日のことなんですもの。

清樣は嬉しく思はなくつて。私は其那ことを考へると飛び立つやうに嬉しいの。女

性の慎まやかさも、淑やかさも忘れて踊り出すんですもの。隨分はしたない女ね。貴方笑つちや厭よ。ですけどね、向つて其那ことを云はれると、そりやもう眞赤になつて顫え出すのよ。可笑しいでせう。何も其那に羞かしがらなくつて好いんですけど、どうしたのでせうか、妙に胸が壓迫されて、舌の根が強ばつて、言葉さへも出來ないのよ。そして顏がホテツて火のやうに赤くなるんですもの。可笑しいわね。だけど、少しも不快でなくつてよ。嬉しくつてさうなんですのよ。

兎に角、もう僅でお休みになるのね。お休みになつたら、速ぐ歸つて下さいな。呉々もお願ひして置きますわ。

まだ澤山申上げたいことがあるんですけど、大分勞れましたから、これで失禮しますわ。

どうかお身體を大切に——一日もお早くお歸り下さることを毎日祈つてますの。ではこれで失禮しますわ。

左樣なら

清　樣　へ　　愛　子　より

二、賣られ行く少女心

町田さん、先日は失禮しましたわね。お見送りまでして下さいまして、私、ごのやうに嬉しかつたか解りませんわ。私、決して貴方の御親切は忘れないことよ。死んだつて忘れませんわ。ね、町田さん、貴方の御親切を私どうして忘れられるものです

か。それを忘れてなるものですか。私だつて人間ですもの。

それはさうこ町田さんは私を疑つて居被るでせう。恨んで居被るでせう。そして怒つて居被るでせう。

ですけご私にはごうしても、免れるこごの出來ない遭難ですもの。私は已むを得ないこごゝ諦めてゐますの。死んだこ思つて諦めてゐますの。貴方には濟まないこごは私能く知つてますけご、私の力ではごうするこごも出來ないんですもの、勘忍して下さいな、可憐な乙女こ思召て、私の罪を許して下さいな。ね、町田さん、お願ひですから、私の大罪——總てを許して下さいな。其の代り私屹度貴方の爲めに盡しますわ。假令死んだつて、殺されたつて、心許りは貴く清く貴郎に捧げますわ。永遠に貴郎の妻こ思つてますわ。いゝえ何處までも妻ですわ。

如何に穢ない泥の中へ棄られても、ごれ程汚れた社會へ落し入れられても、心許りは濁りに染らず、傷つけられず、屹度貴方の妻こして滅びますわ。

肉體を離れた清い心は、何處までも清く貴方に捧げます決して人の爲に、ムザ〳〵こ蹂み躙られやしませんわ。ね、町田さん、私さうなんですの、私の決心はさうなんですの、ですから母や養母に對して、モロクも犧牲になつたのですのよ。私の肉體總てを犧牲にして親達に盡したのですの。身にも親にも替へられないこ思つた。貴方を棄てゝ、彼の恐ろしい大連へ賣られて行きますのよ。これも矢つ張り浮世の義理なんですもの。町田さんだつて同情して下さるでせう。

戀しい！　慕はしい！　こ明け暮思ひつめてゐた貴方こお別れして、あの恐ろしい！　大連へ賣られて行く乙女心！　それは實に悲慘ですわ。殘酷ですわ。氣も、胸

も張り裂けるやうですわ。半死半生の思ひですわ。

かうした可憐な、何んの頼りもない乙女に、同情して下さる人は、私の好きな、私が信じてゐる、そして私を愛して下さる貴方一人ですの。私は貴方お一人が同情して下さればそれで澤山ですわ。日本中の總しの人が、總て私を憎んでも、貴方お一人が私の同情者であれば、それで私は滿足ですわ。世界中の總ての人を敵にしても、貴方一人さへ私の味方をして下さればそれで私の理想は盡さるゝのよ。ね、町田さん、私の心の裡——貴方能く判つて——判つてるでせう。私の意思を了解して下さる人は、此の廣い世界に町田さん一人しかないんですもの。判らない筈はないわ。

誰かの小説に、肉體こ戀愛こは全然別物だつて、書いてあつたわよ。私はその模範になるんですの。屹度行つて見ますわ。ね、町田さん、私の爲めに祈つて下さい。お願ひですから……

私ね、過ぎ去つた事實が、眼の前にこびり附いて、眞實に貴方が戀しくてならないの。貴方こ初めて遭つた時のこゝや、嬉しかつたこゝや、悲しかつたこゝが、マザマザこ眼の前に浮んで、私を苦しめるのですの。

噫！　あの時は嬉しかつたわね。町田さん、

貴方だつて矢つ張りさうなんでせう。ほら！あの時さ、貴方こ初めて逢つた時よ。ね、嬉しかつたでせう。だけご私羞づかしかつたわ。胸がドキ〳〵してよ。身體が顫えてよ。そして身體全體がワク〳〵してよ。舌の根が強ばつて、口が利けなかつたわね。町田さんだつて、さうでしたわ、ホ、、、、ね、お互が眞つ赤な顔して居たわね。今一度あゝした羞づかしさ！　嬉しさ！　に逢つて見たいこゝよ。

私さうしたことを思ひ出すこ、もう死にたいやうですわ。死んでこの苦しみから去りたいこ思つてよ。それに貴方こ契つたこと――それが皆嘘になつたのね。暗から闇に葬られて了つたのね。死んでも二人は別れないこ云つたのは嘘だつたわね。……だけご私、決してそれを嘘にしたくないことよ。肉體こ靈魂は全然別なんですもの、お互が別れて居ても――さうだお互の體が別れて居ても、二人の精神は矢つ張り結び合つてますわ。お互に仲好く手を引いてます、ことよ。そして二人が行くべき正しい道を――正しく歩いてますわ。否、私はさうした正しい道を歩いて行きたいこ思ひますわ。私は何時までも、永遠にさうした境遇に居たいことよ。お互に心だけでも。ね、町田さん。

さうでなくつて、私、さう信じてますの。

でないこ、私、賣られて行くんです

もの。

私ばあの恐ろしい、寂しい、そして寒い大連へ賣られて行くんですもの。泥の中へ葬られて了ふんですもの。私の肉體は泥に因つて穢されて了ふんですもの。

噫！　私、悲しいことよ！　ね、町田さん！

私、もう何も云へませんわ。もう私悲しくて、もう何も云ふことが出來ませんわ。私の小さな胸は一杯になつて、破れさうですわ。手がワナ〳〵こ顫えて字が書けなくなつたわ。涙が止め度なく湧くやうに出て、始末にならなくなつたわ。

噫！　賣られて行く乙女心は、誰でもかうでせうか、此麼に苦しいんでせうか。肉體が泥に因つて穢されて行く乙女の心は、皆んな此麼に悶えるんでせうか、死んで行く人よりも、もつこ強い、恐ろしい、悶えが私を苦しめてならないことよ。私はごう

かして死んで行きたいと思ひますわ。死んで行く人よりも、賣られて行く人が苦しいんですもの。

噫！　私又悲しくなつたわ。私賣られて行くんですもの。肉體が泥に因つて穢されて了ふんですもの。人間の最も貴い感情が、人の爲めに蹂み躙られて了ふんですものの。人間としてこれ程悲しいことはなくつてよ。

それに戀しい〳〵貴方と、別れなければならないんですもの。可愛さうと思つて下さいな。ね、町田さん、これが一生の袂れかも知れませんわ。賣られて行く私は——死んで行く私よりも、もつと〳〵辛いんですもの。人間の最も貴い自由感情とが、總て蹂み躙られて了ふんですもの。ね。町田さん、同情して下さい。お願ひです。……

まだ〳〵書きたいことは山程もありますが——

もう夜が明けましたから、これで失禮しますわ、隨分御壯健で——ね、町田さん！これが一生のお別れになるかも知れませんから。

ごうぞ〳〵お身を大切に——そして私が此の世に居る者と思召されず——靜枝さんとお仲好くお暮し下さいませ、ですけど、私のやうな、可愛さうな乙女があつたことだけは、何時になつても、お忘れにならないやうにして下さい。これが私の一生のお願ひです！　ね、町田さん、利いて下さるでせう、俊子の一生のお願ひを——利いて下さるわね。町田さんは、私を愛して居て下さるんですもの。いゝえ、私に同情して居て下さるんですもの。屹度お忘れにならないことよ。私信じてますわ。ですから私安心して賣られて行きますわ。……

隨分お身體を大切に——さよなら。

大阪にて　賣られて行く俊子

町田　正様

「此の書は十五才になる俊子が戀人町田正に宛た艶書です」

◇繁昌する商人に掛けて

何んに解く
二三日經つた鼠に解く
心は「もう毛」儲けが澤山

皮肉屋の寢語

一、おめかしの薄着

男性が女性の歡心を買ふために、沍寒凜々として指を墜こす寒中、綿入れを用ひず。女性にして姿勢美を現す爲めに、甚だしく腰部を苦めるは、何れも自分知らずの大馬鹿者である。

何を苦んで男性が、おめかしをするか、大切な命を犧牲にしてまで、女性の歡心が買ひたいのか。吾々のやうな鈍感者には、こんちんかんちん理由が別つたものでない。最も寒中たりとも綿入れを欲しないだけの傑の者であるなら、敢て咎めもしないが、ブル〳〵ガタ〳〵こ顫えて居ながら、薄着をする必要が何れにあるか。薄着をし

てブル〳〵と顫えて居る男性が、ごれ程立派か其麼悲しい、苦い思ひをして女性に阿諛つて、それが何んだ。生命を的に危険を冒し、おたんちやんの機嫌機褄を窺ふこばそも〳〵何事だ。

恐ろしい流行感冒の襲来を冒しても生命を賭にしても矢つ張り女性の歡心が買ひたいのか、體の健康を犠牲にしても美人がりたいのか、それ程他人を喜ばせたいのかそれでは命あつての物種を知らぬ大馬鹿者と云はねばなるまい。

隨分世の中にはかうした馬鹿なお目出度い人間があるもんだ。

冱寒凛々として指を墜こすこいふ寒中、寢衣の儘、肩に手拭でも掛け込むでお湯の歸りで御座ると許りに裝ひ　二里が三里でも好きな途には又格別、粋な所へのさばり込み「小野の道夫が素通か」を極め込むで風邪を引くのも何んのもの「用もないのに二

度三度」通る野郎の面見れは憐れにも不憫にも死人のそれのやうに血の氣を失つた、青ピヨタン實に言語に堪えない愚物ではないか。

こんな野郎が粋樣で通るなら、天保錢も八文では通らぬ筈だ。

二、厭な男と時雨の雨

吾々が甚だしく迷惑するものは、そも〳〵何んであらう。

一、肺病患者の手料理を強いられること

二、債權者に借金の催促を受けること

これ等は吾々にとつて一大禁物だ、所が御婦人方はこれ以上に迷惑することがある

さうだ、それは嫌な男に口説かれること、次は途中で遭つた時雨の雨ださうな、勿論

吾々野郎にした所で途中で遭つた時雨には困る。

だが御婦人方のお困りは又格別なんだ、生命こつり替への髪が毀れる。生命から二番目の着物がぬれる。茲に於てか婦人方が時雨の雨を迷惑の一に數えられたのも無理のない話だ。

それに厭な男に口説かれること——これも有難迷惑の極であるさうだ。野郎にしてもすかぬ女に泣いて口説かれること餘り好い氣持ちがしないさうだ。所が憐むべき吾々にはさうした有難迷惑は尠しもない。ごんなすぼた面でもあばた面でもこちや厭やせぬ、關まやせぬ。さうした有難迷惑の襲來を神に祈つて待つて居るが、只だの一正も襲來せぬことは何んたることぞや

兎に角御婦人方は一般に情的で弱いのが特戀だ。で露骨に「厭だ」「嫌いだ」いきすかない野郎だ」こ無鐵砲に肱鐵砲を食はせる理由にも行くまい、さう亂暴に——無鐵砲に肱鐵砲を食はせるこ後の祟りが恐ろしい、で祟りのない樣に肱鐵砲を喰はせずに斷るには却々骨も折れるであらう。して見るこ矢つ張り厭な男も御婦人にこつては有難迷惑の一つであらう。だが吾々にはさうした有難迷惑者が一正も居ないので却てないのが有難迷惑の極だ。さてもく世の中は矛盾したこの多いもの哉。

三、僞外人の哀れさよ

日本人は兎角人の眞似をすること頗る上手だ。否、眞似ることを多く好むのだ。殊に新がる者になるこ外國語の何たるを解せずして、西洋人のそれのやうに髪の毛こごうゞらせたり。フロックを着込んだりシルクハットを冠いたり用もない洋杖をつい

たりして居る。御婦人方になると直釋的な髪を結つたりして得意がつて居る。其の癖往來などで外人に會つて道でも聞かれうものなら、眞赤な顔して啞か聾のやうに默々として居るではないか

嘗つてこの種の愚物が外人に所を聞かれて赤恥を搔いて居る所を見た、それは實に慘めなもんだつた

外人も外人だ一度聞いて默つて居るやうな野郎は言葉が通じない僞外人として訪ねなければ良いものを何處までも追窮して居たのだつた、それも其の筈だ。頭にシルクハットを戴き、身にフロクを着け手には大きな洋杖を携へ一見外人であるかの樣に思はれる紳士であつた。だから此の人にして言葉が通じない理由がないと思つたのであらう。

所がその先生外面だけの紳士で内面は愚にもつかぬ先生だつた。で、こう〳〵眞赤な顔して雲を霞にと逃げ去つたのであつた。

何れにしても日本人は、何事に因らず、拘らず速ぐ人の眞似をする。そして眞似ることが甚だ上手だ、けれども餘り大眞似をすることは宜しくない。身分不相應な眞似方をすると飛んでもない慘めな目に遭はねばならぬ。否、大怪我の固た。大怪我を覺悟してまでも僞外人を裝ふ必要が何れにある。赤恥を搔いてまでも僞外人が裝ひたいとはさても〳〵驚いた大物好き哉

四、惚氣廣告

そも〳〵惚氣なるものは自家辯護でもない。そして又純然たる自家廣告でもない。

然らば何んであるかと云ふに一種の娯樂として用ひらるゝ愚言であると解するより外はない。即ち嬉しさ餘つて知らず識らず、我を忘れて口に出すものこれ惚氣である。

世の中には隨分品格を失墜し、地位を下落することも知らず、この惚氣廣告に東奔西走するお目出度い人間も尠くない

殊に氣の早い自惚の強い奴になると往來で會つた女が「厭な野郎だ」と尻目にかけても、ごつこいさうは受取らぬ「ハテな己れに秋波の矢が立つたな。これは有難い」と早合點して速ぐそれを惚け廣告の材料にすると云ふ騒ぎだ

兎に角惚氣の材料と云ふ奴は、幾何でもあるもんだ。藝妓や娼妓が「ね貴郎、私貴郎が大好きよ」「べろり」と遣りても惚氣の材料に充當されるのだ。だから其の範圍は實に無限だ

馬肉屋の女中がポチを得べく、甘つたらしい言葉の一つも使ふと例の早合點、早速惚氣廣告の材料を得ると云ふではないか。

就中カフエー、ビフテキ先生に肩の一つも打たりうものなら、それこそ大變だ。腰の邊がフライ〳〵と云ふし、祝儀をお呉れと云へばソース〳〵と云つて出すし「ね貴郎」と云つて手を握ればコローキと參るし、さても〳〵惚け廣告の多いこと哉。

何れにしてもかうした惚氣を聞かされることゝ――そそは肺病患者に茶を進められる苦しさと殆ど伯仲して居る。それに先生口角泡を飛ばして、長時間に渉る惚氣廣告、何んと有難迷惑の極みではないか。

ヤモメ生活

一、南無出雲の大社様

「男三十は分別盛り」「子供の一人もある盛り」

喜多男君は此麼ことを考へた。だが併し彼には子がなかつた。さうだ、子もなければ妻もない、孤獨の生活に終日泣き暮して居る憐れな先生だつた。

今しも彼は落語家の話を思ひ出して、甚だしく悶え初めるのである。

それは外ではない落語家が、獨身者の半面に横はる所の苦痛――殊に嫁に憧かれる所の光景――さうしたことを皮肉に滑稽に、――

さうだ、喜多男君の現狀、其の儘のことを口から出任せ、尻から出放題に、口角泡

を飛ばせて、喋舌り立てたことである。そしてお負に、嫁を貰つたならば――の空想を手にとるやうに――否、眼の前に見るやうに、面白く喋舌つたのだつた。

で、彼は如何にも感心したらしく、

「全くだ！」と、思はず獨語を云ひ出したのだつた。

さうしたことを連想すると、彼は烈しく焦ら立つて、嫁の必要を痛切に感じた。そして落語家のそれのやうに、嫁を貰つたならばの――空想を初めるのであつた。

「實際嫁を貰つたら愉快だらうな、痛快なことだらうな、己れを呼ぶに、「ね貴方」つて云ふだらうな、悪くないね、愁波に見て極り悪さうに、優しい絲のやうに細い聲で「些いと貴方」とか何とか云つてさ。白い雪のやうに眞白な、可愛らしい手で、肩の邊りを軟らかく、ピシヤリと遣られた日にや、己れの身體も溶けて了ふかも知れない。

さうだ、什麼無理なことでも、ごれ程酷い目に遭はされても、何等の抵抗力はないだらうな、其の上に「妾貴方が大好きよ」なんつて云はふものなら、己れの身體は一體全體ごうなるだらうな、風船玉か何んかのやうに、宙に浮き上がるだらうな、さうしたサイノロヂーをつけ込むで、「些いこ貴方金の指環を買つて頂戴よ」「プラチナの時計を買つて頂戴よ」「帶がないのよ」「着物がないのよ」「下駄も買つて頂戴よ」こ云ひ出すだらうな、そこで己れが「ウン！良シ〳〵何んでも買つて遣るよ」こ云つた日にや一體ごうなるだらうな、一ケ月の給料驚くなかれ、四十五圓ぢや、さう〳〵無限に買つて遣る理由には行くまいつてな、それかこ云つて「一ケ月の給料が四十五圓だから、其麼に買へるものか！」こ怒りつけた日にや、色も戀も熱も一時に冷めるだらう、そして彼方のやうな意氣地のない人は妾は嫌いですから、離緣して下さい」こ此度は

前こ異つた、おたんちやん聲で怒鳴り出すだらうな、怒鳴り出した後は一體ごうなるだらう。ブン〳〵こ腹を立てゝ出て行くだらう。それぢや百年の說法も屁一つの例だ。此の場合に圓滿な解決方法はないだらうか。何んこか調停方法がありさうにも思はれるが、ハテ扨て面倒なものだな、孔子のやうな賢哲な人でさへ「女子こ小人養ひ難い」こ云つたのも蓋しこゝのことだらう。全く女つて馭し難くいものだらうなウン、さうだ、かうした場合には、出鱈目を云つて置けば好いのだ。「其の裡に何でも買つてあげるよ」こ優しく云つて置いてやれば、そこは女だ「ぢや是非ね」こか何こか云つてニツコリするだらう。それはまだ好いこして、女は誰でも燒き餅燒きだつてね。己れが社用で少し遲れて歸つた日にや、燒くだらうな、「オイ歸つたよ」こ己れが云つても返事もせずに、ツンこして居るだらうな、惡くないな、一度でも好いから燒

かれて見たいな、「お前氣分でも惡いのか」と云つても「妾知りませんわ」と投げるやうに云つて眼に涙を一杯溜めるだらうな、「お前何か誤解でもして居るんぢやないか」と優しく宥めるやうに云つてやると、「妾何にも誤解なんかして居ませんわ」とさもさも腹立しく云ふだらうな、惡くないぞ」

彼がさう思つたときは、既に嫁を貰つた。——と云ふより嫁と話をして居るやうな氣になつて了つた。

で、彼は言色を用つて、空想の嫁と問答を初めたのである。

「だつてお前は怒つてるぢやないか」

「怒ることがあるから怒つてるんですよ」

「何故怒つてるんだ、」

「何だつて好いことよ、大きなお世話よ」

愈〻女は荒くなる。

「其麼こと云はなくたつて好いぢやないか」

喜多男は飽くまで優しく云ふ。

「貴方が惡いからですよ、人を馬鹿にして居るんですもの」と、女は泣き出す。

「何も僕はお前を馬鹿になんかしてやしないぢやないか」

「能く貴下は其麼しらゝしいことが云へますね」女は烈しく泣きながら云ふ。

「たつて僕はお前を馬鹿にした覺へがないからさ」

「何でも云ひなさい！あ！妾！口惜しい！」と女は齒を嚙み占めて泣き叫ぶ。

「お前は一體どうしたと云ふんだ」

喜多男は女の肩に手を掛けたやうな表情で云ふ。

「貴方の胸に訪ねて御覽なさい！」

女は益々猛り狂つたやうな聲を出す、

「己れは何にも惡いことをした覺えはないぢやないか」

喜多男は些つと腑に落ちぬやうな表情をして、妙に首を傾げた。

「だつて能く考へて御覽なさい！」

「何を考へるんだ」と、空惚けたやうに云ふ。

「何を知らばくれて居るんです！今何時ぢやと思つて被居るんです！」

女はヂリ〳〵と膝を進めて烈しく迫るやうに云ふ。

「まだ十時前ぢやないか」

「嘘云ひなさい！もう十時半です！今まで貴下は何をして居たのです！何所へ行つて被居たのです！妾眞實に御飯も食べずに待つてるに――噫！口惜しい！」と、今にも胸倉をとらうとする權幕である。

「それが、誤つてゐると云ふんだよ」

「少しも誤つてません！　貴下の方が餘つ程誤つてます！」

「ぢや、お前は己れが女の所へでも行つて居たとでも云ふのか」

「そうです！　貴下程薄情な人はありません！　何時か貴下は何と仰有つたと思ひますか「僕はお前の爲めなりや何でも利く」と立派に仰有つたぢや有りませんか！　それに其の舌の根が乾かない裡に女の所に行くなんつて何です！　人を馬鹿にするのも程があります！　あ！　妾口惜し！　と、叫んで喜多男の胸倉をとつて、ギユー〳〵と

占める風をする。喜多男はそれを跳ね飛ばしながら、

「何を云つてやがるんだ！　この馬鹿奴！　少し遅くなつたからこ云つて其の態は何んだ！　女の癖に男の胸倉をこるこは――」

さう云ひながら空想の嫁――それは大きな蒲團である――をポカリ〳〵こ打つのであつた。

「あらッ！　助けて下さい！」こ、女は悲鳴を擧げる。

「何を吐すのだ！　この馬鹿！」こ、喜多男君は愈猛り狂つて、何んの罪も咎もない薄團をポカリ〳〵こ續けさまに打つのであつた。そして、

「あら！　痛い！　誰か助けて下さい！」

女の聲ば益々荒くなる。

「何云つてやがるんだい！　この尼奴！」

さう叫びながら、喜多男君は一生懸命に大きな蒲團こ取組を初めた。

其の騒ぎに驚かされた多くの下宿人――さうだ。何れも女にカツレツの野郎許りが喜多男君の室の前に　ゾロ〳〵――ウヂ〳〵こ集まつた。

初めの裡は互に

「シイ〳〵」こ、舌の先きで人を制しながら、障子の隙間から腑拔か――間拔か――

さては夢遊病者か――ポカりこ開いたガマ口から、ダラ〳〵だらこ涎許り垂れ出して足も腰も中風のそれのやうに、ガタ〳〵ブル〳〵顫はせつゝ、夫婦喧嘩の樣子は如何にこ、烈しく迫り來る動悸を制へながら、喜多男君の部屋にこ覗き込んだのであつた。

「オイ、君、女が居ないぢやないか」こ、一人の男が云ふこ、

「静かにしろ！」と、他の一人の男が吒咤するやうに力強く云ふ。

「だつて一人しか居ないよ」と、初めの男が又口を利く、

「何居るよ、確かに居るよ、泣いて居るでないか」と、一人の男は辯解する。

丁度其の時喜多男君に少からずラブして居る――當家の女中デブ〳〵君がその話を耳にしたから堪らない。

「喜多男さんが女と話して居る！　何所に！」と、叫びながら喜多男君の部屋の前までドス〳〵と地響諸共、遣つて來て耳を聳えてゐると、安の狀喜多男と空想の花嫁この大格闘、

「殺して下さい！　殺して下さい！」と、花嫁が泣き叫ぶ。

「女の癖に亭主の胸倉をこるとは何事だ！　生意氣なこの尼奴！」と、喜多男君は力

任せ蒲團を蹴飛す、

「あれ！」と、女は悲鳴を上げる。

それを聞いたデブ君の頭には、角が二三本生えた。目が狐のやうに吊り上がつた。口が大蛇のやうに烈けた。と同時に野獣かなんかのやうに狂ひ出した。

「あゝ……妾口惜しい！」と、此度は眞實の女が齒を嚙み占めながら、ジタンダを踏んで口惜しがるのであつた。

さうしたことがあらうとは、知らぬ喜多男君は一生懸命だ。

「何が口惜しいんだ！　貴女が心得違いしてやがつて、この馬鹿奴！」

喜多男がさう叫んだので、デブ君、早合點して自分に云つたものと間違へ、

「何んですつて私が心得違へをした。何時心得違いをしたのです！」と、叫んだかと

思ふこと、狂つた獅子のやうに荒々しく喜多男君の部屋へ駈け込み、行きなり喜多男君の胸倉をこつて其の儘ネヂ倒した。

驚いたのは喜多男君

「なゝゝ！　何をすゝるんだッ…。痛い！痛い！かゝゝ勘忍して呉れ！」こ、助け舟を呼んだが、戀に狂つたデブ君は、イッかな放さうや、益々狂つて愈固く占めるのだつた。

「そゝゝ其麼ことしたら！　しゝゝ死んで！　了ふ！ゆゝ赦して呉れ！」

喜多男君は命限り——恨限り叫んだのであつた。けれども、デブ君却々放さうこはしなかつた。

で、喜多男は死人のそれのやうに眞つ蒼になつて、ブル〳〵慄え出した。

それこ見た下宿人が、事餘りに急なるに驚いてバタ〳〵こ駈け込んで漸くデブ君の手を放した。

其の中に同宿人の一人が蒲團をまくつた。するこ大きな枕がゴロリこ出た。流石のデブ君も二の句が續けないやうに、大きなガマ口をパタリこ開けたなり、さも〳〵驚いたやうに——否、恨めしさうに枕を沈つこ見つめて居たのは滑稽でもあり、又氣の毒でもあつた。

それよりか喜多男君のスタイルこ來ては、珍無類——抱腹絶倒——是れ正に五臟六腑の大洗濯——おへそも、おなかもカッポレ〳〵せざるを得ないこ云ふ滑稽——さてはチンのくしやみか、馗鐘さんの借金なしか——さうだ〳〵濟こきのエンマ顔——それだ。それこ寸分相違のない顔附きで、ガタ〳〵ブル〳〵慄えて居るのは如何にもお

氣の毒千萬な次第であつた。

二、棒が違ふ

嫁を貰つたならばの空想をして大なる失策を演じた喜多男は、多くの同宿人から嘲笑されるので居堪たまらず、こう〳〵ぶらりこ表へ出た。そして歩くこもなしに、ぶら〳〵こ九段の方にこ足を向けたのだつた。

丁度神保町を過ぎた頃から、俄に空が搔き曇り夕立であらう？　ポツリ〳〵こ大粉な雨が降り出した。が、彼は傘を持たなかつた。それ許りでなく先刻程の失策を思ふこ宿へ歸るこことが、何んこしても出來なかつたのである。お負けに何處へ行くこ云ふ當てさへもなかつた。只ぶら〳〵こ歩いて、時間の經過するのを待たなければならな

かつたのである。

それだのに、雨は何の容赦もなくだん〳〵こ烈しくなつて行く許りだつた。

で喜多男君は濡れ鼠になつて、何物かを頻に考へ出した。それは外でもない。

厭な男こ夕立雨は
出逢た所で難義をする

こ云ふ俗諺だつた。

「全く夕立には閉口するな」

さう獨り言を云ひながら、

「女が厭な男に好かれるのはこんなに困るのか知ら、其那筈はない。已れなんか厭な女に惚れられても喜ぶんだもの、其那無茶苦茶な理窟があるもんか」

なぜと考へた。さう思ふと
厭な男と夕立雨は
出逢た所で難義をする
と云ふ都々逸が如何にも浮世離れをしたものゝやうに考へられならなつかた其結果「幾ら女だつて惚れられて困る奴はないよ」と、思はず叫んだ。

其の時はもう九段下の交叉點を踏み切つて居た。丁度其の時だつた。艶なる哉、美なる哉、天女なる哉、床なる哉、ビフテキなる哉、コロッキなる哉、當世流行の丸ボチヤ、デパートメントか、八百屋か、口もあれば鼻もあり、目もあれば眉もあり、耳もあれば毛もあると云ふ美人——而かもそれが女であつた。女性であつた。「女ならでは夜も晝もあけぬ」と云ふ喜多男君の鋭い眼に映じたのだから堪まらない。酒呑みが

酒屋の前を通つて腰を拔かすそれを同じやうに、喜多男君は美人を見て腰を拔かす、もう足が立たぬ腰が拔けたと許りに、電車が來るのも何のその、自働車なんかはそつち退け。腑拔か間拔か空惚けか阿呆か——さては汝は馬鹿奴郎かポカンとして見される狀は何事ぞ。

お負けに俄の夕立雨に濡れ鼠と來て居るので、ごう見ても橋の下の先生樣としか見えなかつた。

折柄通りかゝつた一臺の荷車こそ、人に知られたオワイ屋車、九段の坂に差し掛つては、到底一人の力にては引き上げることが出來ないのであらう。キヨト〳〵として四邊を見廻してから、失禮多くも喜多男先生に向ひ、

「オイ立ん坊上まで押して呉れ五錢出すから」と、車夫は何氣なしに云つた。が、喜

多男先生ウンこも、碎けたこも壊たこも厭こも應こも一言半句も云はなかつた、それも其の筈だ、天下にそれこ名を知られた喜多男先生閣下に向ひ立ん坊こはそも〳〵何事だ。

彼はさう思ひながら、車夫をギューこ睨めつけた。其の鋭い目が又立ん坊のそれこ寸分間違ひはない。

だから愈〳〵車夫は立ん坊こ思ひ、

「オイ〳〵立ん坊早く押して呉れよ」こ、促すやうに云つたときだつた。喜多男は何を思つたのであらう。急につか〴〵こ進み出て、

「何だ！　已れを立ん坊だ！　失敬なッ！」こ、嚇こなつて叫んだが、間もなく、

「貴様は已れを立ん坊こ見るか」こ、此度は今よりも優しい聲で訊いて見た。

「さうだねえ、立ん坊こしか見えないね」

車夫は何處までも立ん坊こ思つたのでその通り云つた。

「何だ立ん坊こしか見えない、馬鹿！　其那棒ぢやねえ哩　もつこ強い棒だ！」

「ぢや、一體貴様は何の棒だ！」

「貴様は何棒こ思ふか」

「さうだねえ。立ん坊でねえこすれば篦棒か」

「馬鹿！　其那詰まらぬ棒ぢやねえ」

「それぢや、吝嗇ポか」

「馬鹿！　其那經濟家ぢやねえ哩」

「それでは朝寢ポか」

「馬鹿！　其那弱い棒ぢやねえんだ！」
「ハテな、それでは貧ボか」
「其那もんでもねえんだ！　もつと強い棒だ！」
「強い棒だ、それぢや解つた、亂ボーだらう」
「馬鹿野郎！　其那無茶苦茶な棒ぢやねえんだ！」
「ウン！　さうか解つた〳〵、泥棒だらう」
「何云つてやがるんだい！　これでも忠良な國民だッ！」
「それぢや一體貴樣は何棒だらうな、ボーとするこ――ウンあるく〳〵さうだ、心棒だらう」
「馬鹿野郎！　車ぢやねえぞ

「ウン！　さうだ、貴樣でも人間だつたな、人間こすれば女房かな、女房にしては女らしくねえな、ハテ扱て何だらう」
「感じの惡い奴だな、已れの眼を見れば解るだらう、泥棒のそれのやうに皺許り睨つてら」
「さう云へばさうだ、だかそれは生れつきだらう」
「馬鹿野郎！　失敬なことを吐すな、これでも當があるのだ、當がなければ皺を睨めつけては居ねえのだ！」
「其の當こ云ふのは一體何だい」
「貴公は餘ッ程鈍感な野郎だな！　鼻の下を能く見ろ！」
「ウン！　判つた、ぢや貴公は立んボーでなくつて、二本棒だな」

「其の通り〳〵」

「道理で立ん坊にしては強いと思つたよ」

「當然えだ！　棒が二本だもの」

「ワハア！　却々隅に置けぬ理窟を知つてやがるな」

「かう見えても立ん坊なんかと生れが違ふんだ！　天下にそれと名を知られた喜多男先生様だ！　知つてる者は知つてるし、知らない奴は知らねえのだ！」

喜多男君は先刻の失敗を悉皆り忘れて、馬鹿に威張り散らしたのだつた。

喜多男君の生活――さうだ、ヤモメ生活の半面に横たはる所の滑稽、奇抜は却々澤山あるが、餘りくどくしく云つたのでは、恐れ入るから先づこの邊で切り上げて置かう。

珍らしい婿選び

一、美人だね

美人と見たら足も腰も立たぬと云ふ連中が多い世の中に――殊に妙齢の美人が婚でも貰ふなどと以ほうものなら、小糠が三合あることを忘れて、我も俺もと押しかける猛烈さ！　何んと恐ろしい世の中では御座らぬか、

否、甘黨全盛の世の中では御座らぬか。

將來デモ亭主でお腰物の洗濯から、萬濯に至るまで一切くうやく、何んでも御座れと許りに――總てのことを引受ける位な犠牲は事程にも感じないと云ふ、至つて蟲の良い御亭主志望者許り。さうだ、美人の嬶アさへ持てば、假令火の中、水の中、こち

や厭やせぬ關やせぬ、嬶アの爲めなら何所までもと云つたやうなサイノロジーの全盛時代、この世辛らい世の中に、斯うした野郎が御座るこはさても〳〵世の中は又格別で御座る。

「オイ、君小石川の美人を知つてか」

「何だつて彼れを知らないものがあるもんかい、彼の愛子だらう」

「おや、君は知つてるのか、隨分美人だつてね」

「美人の美人でないのつて、到底其の美しいことは形容の語がないさ」

「其那に美人かね」

「そりや、もう何ども名狀しかたい美人だよ」

「さうかね、それぢや君は見たのかね」

「これでも拜顏の榮を得て居るのだ！」

「ウン！　偉らい、却々隅に置けない」

「それはさうと君は今日の新聞を見たか」

「まだ見ない」

「見ない、それぢや到底出世が出來ないよ」

「さうか、どうしてだ」

「君のやうに世事に鈍くては駄目だ」

「一體新聞に何が出て居るのだ」

「教えてやるから、何か散財よ」

「君にかゝつた日にや仕樣がないな、それぢや燒芋でも散財るこにしやう」

「馬鹿！　焼き芋なんかで敎えられるか、其那安つぽいものゝ違ふのだ、天下の業平さんになれるか否かゝ云ふ重大問題なんだぞ！」

「其那大きな問題か」

「大きいの大きくないのつて、天下別目の戰ひなんだ」

「ぢや仕樣がねえ、洋食屋にしよう」

「ウン！　洋食屋か、そりや至極結構だ、例のビューの家へ賴むよ」

「オイ〳〵君、今から腮を汚す奴があるかい、汚らしい早く拭かないか」

「何云つてやがるんだい、君の方が餘つ程三千尺の癖に」

「まあ何でも好いよ、早く行かう」と、二人は意氣揚々として、或洋食屋へと飛込むだ。固より馴染の家こて、遠慮容赦もあらばこそ、來らつしやいの合奏と共にトント

〳〵と二階へと上がつた。上がると同時に眞向ひになつて腰を下ろした。

「オイ君新聞の一件を早く話せよ」

「何云つてやがるんだ、注文から先にしろ」

「オヽ、さう〳〵忘れて居た何が好いかな」

「駄になつちまうな、女にかけちや眼がないんだから」

「何さ眼がないのでないよ、眼があり過ぎて困る奴さハアハ……」

「其那だんご理窟を云はずと早く注文をしないか」

「馬鹿に急ぎやがるな、それはさうと何が好いかな」

「何だつて好いさ安くて美味くて澤山ありや」

「さう〳〵その通り〳〵大いに贊成々々！」

「詰らぬ所へ賛成しやがるな」と、一人の男がさう云ひながら、女ボーイの方に向き直つて、

「オイ姉さん、何でも好いから安くて美味くて澤山あるものを五十錢許り持つて來て呉れ」

「オイ〳〵串談も休み〳〵にしろ、僅五十錢でおつ拂ふ決心か」

「さうさ、五十錢も散財ば澤山だらう」

「馬鹿云へ、天下の一大事を敎えるに事もあらうに大正紙幣一枚でおつ拂ふなんつて其那馬鹿なことがあるかい」

「ぢや今十錢」

「馬鹿！」

「仕方がねえな今二十錢」

「オイ〳〵セリ賣り屋ぢやあるまいし十錢二十錢と出られて堪まるものか」

「それぢや、幾ら散財と云ふのだ」

「さうさね、五圓に負て遣らう」

「五圓！」男は顏色を變へた。

「さうだよ、五圓ぢや安過ぎるが君のことだから、大負さ」

「已れは歸るよ」

「一體君は五圓の金がないのか」

「其那大金があるものか」

「仕樣がない奴だな、仕方がない一圓に負て置かう」

一ぢや、已れも仕方がねえ、清水の舞臺から飛んだ氣になつて一圓出さう」さう云ひ切つて男はボーイに向ひ、

「姉さん、何でも好いから澤山持つて來てお呉れ」

さう云ふと一人の男が

「姉さん〳〵二人で一圓しかないんだよ、其の決心で澤山持つてお出よ」

ボーイは優しく、

「ハイ、畏まりました」と、答つゝ立ち去つた。ボーイ去ると同時に甘黨の一人が、

「オイ君、天下の一大事つて一體何たい」

「愛子のことさ」

「愛子のことは解つて居るが、それがどうしたと云ふんだ。」

「彼女が婿を貰ふと云ふ騒ぎなんだ」

「ウン！　そりや一大事だ！」

「さうだらう、君もさう思ふだらう、それに彼女が云ふことが頗るコッテるよ」

「何と云つてるのだ！」

「それがね、新聞に書いてあるんだ」

「何と書いてあつた」

「今日の社會に行はれて居る多くの結婚は徒らに形式にのみ囚はれ、眞に其の目的を達して居る人が少ないやうです。だから妾は一切形式と云ふことを度外視して廣く社會からこれを求めやうと思ひまして、募集を到しましたので御座います、ですから妾の希望に御賛成下さつたお方は、來る三日午後一時までに妾の宅へお集まりが願たう

御座います」こ、書いてあつたよ」

「ウン！　成程ね・偉らい女だね」

「偉らいだらう、あれだけの綺麗をして、彼れだけの財産を持つた云ふ娘がべきこと

でないよ、實に感心な女ぢやないか」

「已れもごつかり惚れ込むだよ」

「止せ〳〵君なんか幾ら惚れたつて垣根の土持ちだから」

「馬鹿云へ已れなりや大丈夫ださ」

「串談も好い加減にしろ！えんまの曲藝見たいな面付きしてやがつて馬鹿々々しい」

「そりや君のことだらう」

「何を云ふのだ、はゞかりながら已れなんかこ來ちや女性に好かれる素質を持つて居

るんだ」

「笑はせるない！　おへそが嫁入りして了ふから、止せ〳〵」

「それはさうこ僕は失敬するよ」

「何所かへ行くのか」

「明日の準備さ」

「君行く決心か」

「當然へだ行かずに居られるもんか」

「君なんか止せよ」

「何だつて好いよ、已れはこれから歸つて準備して置くんだ」

「準備だ！　一體何するんだ」

「先づ散髪してお湯に這入つて質出して白粉を買つて男ぶりを好くするさ」

「ウン！　さうだ、そりや好い考へだ、已れも斯うしちや居られない」こ、云ひ〳〵二人は誰云ふこなく注文した洋食をも喰はず、生命より太切な一圓紙幣を投げ出して、一目散に驅出したのであつた。

二、口頭辯論

愈目的の日が來た。愛子の家の門前には「小糠が三合あれば養子に行くな」の諺を忘れた野郎共が、ウヂヤ、ムヂヤこ雨後の筍かなんかのやうに、彼邊からも此邊からも集まつた。

「皆樣、ごうか此邊へ來らして下さい」

女中が斯う云つたかこ思ふこ、恰で五月頃の虱のやうにゾロ〳〵キヨト〳〵、して這入るのであつた。そして指揮官たる女中の命令に因つて正しく、恰で兵隊さんの行列見たいに、姿勢正しく列んだ。

間もなく番號を調べた。

軈てそれが濟むこ天女のやうな、甘黨の鼻毛を抜くやうな、美しい奇なる愛子閣下が淑かにスラ〳〵こ、音もなく御降來ましました。

「さあ！　大變だッ！」こ、小糠を忘れた連中が襟を正すやら、鼻を吸するやら、鼠の尻尾のやうな赤髭を搔き上げるやら、大きな——一割も二割も大きなガマ口を一文字に結ぶやら、エヘン、ウフンで氣取るやら、直立不動の姿勢をこるやら、それはそれは恰で間抜か俯拔が寫眞でも映るこきのやうに——これ一生の大問題こ許りにスマ

シ込んだ其の狀は、阿呆か怜悧かこんちんかんちん理由が判つたものでない。

然るに愛子孃閣下は滿る程の愛嬌を眞向から振りかざし、甘黨の感情を惱殺するやうな優しい聲で、

「これから皆さんに對し御質問しますから、一人宛お答下さいませ、宜しう御座いますか、お答が衝突しないやうにね」こ、云つて先づ自ら椅子に寄りかゝり、多くの甘黨を沈つこ見詰めた。

さあ小糠を忘れた連中供の胸騷ぎは大變だ、我こそ當家の花婿樣だこ許り、自惚れて居る連中許りだから、其の騷きは又格別だつた。一體何を訪ねるのであらうこオツカな吃驚だ。詰らぬことを云つては一生取り返しがつかぬこ思ふから、胸がドキ〳〵こ荒浪でも當てられたやうに烈しく鳴る。

腰が風船丸のやうにフラ〳〵する。お負に顏が火にでもかけられたやうにカツカカツカこホテリ出す。お尻の方では大砲のやうな大きなお屁が飛ひ出したがる。それに身體全體がフワ〳〵して中風持ちのやうに寒くも暑くもないのに慄え出すこ云ふ有樣だ。

かうした心理狀態——否、心痛をして居る時だつた、愛子孃が尙言葉を續けた。

「それではお質問を致します、一體貴男方は美人の女こ結婚するのが幸福だこ思われますか」

「勿論です、勿論です、」

「ではこれには一人も反對の方はありませんですね」

「ありません、有りません」

「それでは財産家へ行くことを御志望ですか」
「云ふまでもありません、吾々の希望はそこにあるのです、」
「皆様は如何ですか」
「前者と同じ希望を持つて居ります」
「ぢや、教育のある女を好まれますか」
「云はずと知れたことです」
「ホ、、、これにも反對がないので御座いますか、それでは今一歩進めてお訪ね致しますが、女が美人であつて、教育があつて、而かも財産がある家であればサイノロジーで一生涯を送りますか」
「無論我慢します」

「一人も反對する方はありませんか」
「ありません、有りません」
「それでは、デモ亭主で辛抱なさるこ仰有るんですか」
「左様です、辛抱します」
「皆様如何ですか」
「辛抱する者許りです」
「それでは細君のお腰物の洗濯から萬濯から、子守り役まで勤めますか」
「勤めます、五十三次總て勤務致します」
「異論は有りませんか」
「一人もありません」

「では細君から虐待を受けて頭の一つも打たれても小言を云ひませんか」

「何んこも云ひません」

「別に異說はありませんか」

「滿場一致です」

「ホ、、、、何んこ云ふ生氣地のない男性許りでせう、一體貴郎方は活きて居られるので御座いますか、血が全身に廻つて居ますか、それでも大腦が御座いますか、睾丸の所有者で御座いますか、男性こしての感情が存在して居ますか、羞づかしいこは思はれませんか、……噫！　日本の家族制も既に々々にです！　妾は貴郎方のやうな生氣地のない方は嫌いです！　其那はしたない考へで居られる男性は妾は厭です！　何がなくこも男子は男子こして、其の職に――さうです、專心努力し飽

くまで男子こしての立場を明かにする人であれば、立派な男子です、教育がなんです、學問がなんです、地位がなんです、財産を的に婿養子にならうこ云ふ人にこつて、其那ものが何んの役に立ちませう。財産こ結婚するやうな男子に――縱令學問があつたこしてもそれは寶の持ち腐れです、否、もつこ强く云へば軈ては養家を滅す素因です、

噫！　何んこ云ふ情ない世の中でせう、――

噫！　何んこ云ふ生氣地のない男性許りでせう。

苟くも男子こして、さうです女性の夫こして、一家の主長こして、家族全體を統御して行く人がですね、自分の權力の範圍に於て、而かも妻たる女性に虐待され、大切な頭を打たれても、あゝそかくで一生女性の犧牲になつて活き伸ひて行かうこ云ふ男性の心が、妾にはどうしても解することが出來ません。

理想も感情も――總てを犠牲にして、弱い女性の玩具同様になつて、一生を活らさうかと云ふ、生氣地のない男性が妾は腹立しくてなりません、今日の男性が二言目には、「持參金々々々！」と、叫ばれるのが癪に觸つてなりません。

結婚は決して財産や地位や教育を目的として居るものでは有りません。兩性相投合し、心を一つにし、苦樂を俱にすることが、其の最大目的なのです――

お互ひの心に障りがあつて意思の了解を缺いた夫婦であれば、如何に多くの財産があつても、どれ程高位高官であつても、其の夫婦は決して、幸福な家庭は造れません。

必ず暗い頼りのない、悲しい――さうして淋しい生涯を送らねばならないのです。

人間の貴い感情の働きは物質では求めることが出來ません、物質で求めたものは弱いものです、其那弱い物を求めやうとする生氣地のないはしたない人間は妾は見るの

も厭です、清い感情から湧いて出た誠の愛であつて、其の貴い愛が夫婦間に萬偏なく交換されるものでなければ、眞の夫婦では有りません、水も洩らさぬだけの圓滿な平和な家庭が造れないことは、火を見るよりも明かな事實です。

何れにしても、夫婦は何處までも異體同身であらねばなりません、ですから、妾には地位も要りません、財産も要りません、又教育の必要も感じません、只だ妾が愛するのは、――否、欲しますのはお互の心なんです、清い貴い何等のわざかまりのない心なんです、誠の愛の交換なんです、妾はこの要求の爲めには總ての財産――凡ての地位――總ての名譽を拋つても決して厭ひません、共に働き共に樂み俱に苦勞することが出來るなら、妾は夫の爲めに一生を犠牲にします、それが妾は何よりの樂みです。

夫を尻に敷きお腰物の洗濯から子守の役まで夫にさせて、それがどうして愉快であ

りませう。——

弱い女性が強い男性を服從させて、それがごうして幸福でせう。——

夫は夫たるの權利を持ち妻は妻としての義務を守り、其の間に温かい愛が交換され苦しい時にも樂しい時にも、倶に〳〵手を携へ、大平洋逆卷く沈濤の中までも、ナイヤガラ瀑布の中までも、こちや厭やせぬ、關やせぬ、でなければなりません。

ですから妾はさうした立派な心の所有者たる男性を求めて居るので御座います、若しさうした男性があるならば、明日こは云ひません、今速ぐこゝで結婚致したいこ思つて居るので御座います。

人倫の大道に基く結婚は、須らく人物本位であらねばなりません。

如何でせうか今日お集り下さいました方々に斯うした立派な心の所有者が御座いせうか妾は絶對にないこ思ひます、さうです、藥にしたくも御座いません。

總てが落第です、男の癖に何んでせう、お化粧をするこは何事でせう。

男子は何所までも強きを以て誇るべきものです、これこ反對に女は弱きを以て——

さうです、位を以て勝利を得るのです、弱い所を見せて強い男性の鼻毛を抜くのです

何れにしても貴郎方には強い所は少しもありません、これだけ妾が失禮なことを云つても皆樣には一言半句も出ないでせう。弱い女性が此麼ことは云ひたくはありませんが、社會の爲め、又は我家族制の爲めに申上げたので御座います、ですからごこか妾の意思を了解なすつて下さつたなら、將來財産こ結婚したり、教育こ結婚したり、名譽に憧れて結婚したり、しないやうに願ひたいので御座います、甚だ暴言を申上げましたが、ごうか惡しからずお許し下さいませ、長々御辛抱下さいましたが、これで婚

選びは終りましたから、そろ〳〵お歸りが願ひだう御座います。」と、滔々として息もつかずに饒舌り立てたのであつた。

餘りのことに、小糠を忘れた連中達は、開いた口が閉まらぬと云つたやうに、ポカンとして、愛子孃の美くしい顔に見とれて居る狀は、他人の見る眼も哀であつた。

「若し御質問が有りましたら、
本郷區湯島切通坂町五十一石角宛へ――」

「完」

大正十年十月廿五日印刷
大正十年十一月五日發行

おへその嫁入り
定價 金九拾五錢

著作者　東京市神田區今川小路二ノ十七　石角春洋
發行者　東京市京橋區鈴木町八番地　稲垣利吉
印刷者　東京市神田區表神保町十番地　鷲尾參吉
印刷所　ポイント印刷株式會社

不許複製

發行所　東京市神田區今川小路二ノ十七　段書房
振替東京二六六六七

◆石角春洋先生著

人をチヤームする

應接の仕方

!! 男女共通の社交術 !!

社交の寶典

今日の社會は兎角交際が上手でなければならぬ殊に人に好かれ成功し上手に金を儲けて立身出世の途を開發せんとするには徹底した交際術を學んで之を實際に行はなければ到底其の目的は達しられない本書は世態人情に通じた著者が凡ての場合に——凡ての人に對し適當な應接の仕方を誰でも解り易く而も面白く公開したものである兎に角頭を搔いたり恥を搔くことの嫌ひな人は是非本書を一讀あれ

◆巨萬の富も社交應接の巧拙による

◆白熱的大歡迎賣切れぬ内注文あれ

三六判四百頁クロース美本　定價　一圓二十錢　送料　八錢

681
680

九段書房

終